SPECIAL

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

USE Writeを使った ライティング指導の留意点

工藤洋路（玉川大学）

USE Write では生徒に何を意識させるか

USE Write では，１文レベルを超えて，２文，３文，それ以上からなる，まとまった英文を書く力の基礎を鍛えることを目標としている。USE Write の特徴として，「ジャンル」「状況」「読み手」などへの意識が挙げられる。つまり，「誰にどんな状況で，どんな英文を書くか」という，実生活の中で書くという行為を行う際に考慮していることを，USE Write の活動内でも意識することで，実践的な書く力が向上することが期待できる。

特に，読み手を意識することは，書くべき内容を決めるうえで重要な役割を果たす。「海外の姉妹校の友達」（*Book 1* Lesson 9）が読み手であれば，日本の文化や慣習には疎いことを踏まえて書く必要があるし，「新聞の読者コーナーへの投稿」のように，読み手が「不特定多数」（*Book 3* Lesson 6）であればそれを意識して書く必要がある。この点が，各 Lesson の GET Practice，3 Write とは大きく異なる。

USE Write の活動の意義

USE Write では複数の文を書くことから，これまで習った文構造や文法事項を活用する絶好の機会となる。言い換えると，自分の頭の中にある文法のデータベースから，自分が書きたい内容を書くのにふさわしい文構造や文法事項を選択するというプロセスの学習ができる。英語学習において頻繁に使われる「定着」や「活用」という言葉が意味するのは，この「必要な材料を選択できる段階」であると考えれば，USE Write の活動の意義が明確になる。

USE Write のもう１つの意義は，複数の文をどう積み重ねて１つのまとまった英文を構築するかを学べることである。つまり，「文と文のつながり」への意識を高めることができる。この点について『中学校学習指導要領解説 外国語編』では，「『文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと』の部分は，内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分ではないという課題に対応して今回の改訂で新たに加えたものである」と記載がある。複数の文を書くことが求められる USE Write を行うことで，この課題が解決されていくことが期待できる。

USE Write で「文と文のつながり」を意識

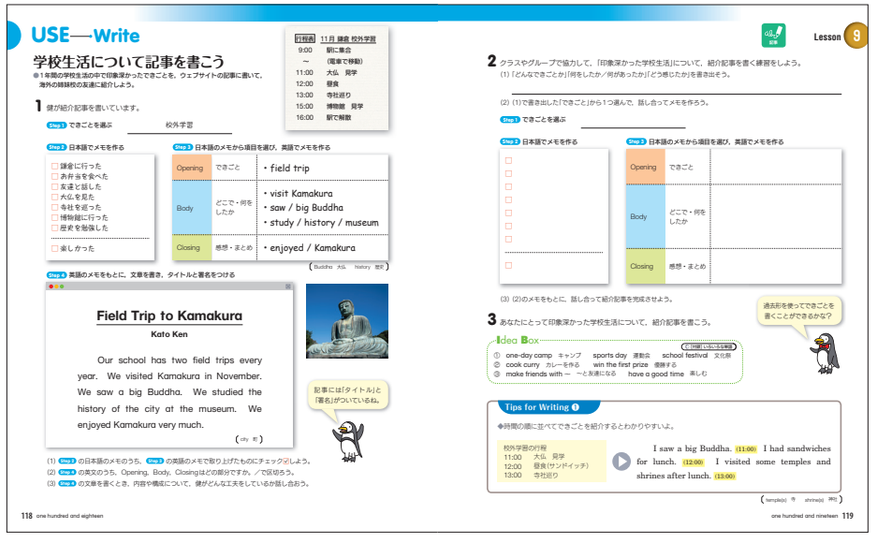
「文と文のつながり」は大きな意味では文章構成に関わるものだが，USE Write ではそのほとんどが，

Opening（O）⇒ Body（B）⇒ Closing（C）

という３段階の文章構成を提示している。例えば，*Book 1* Lesson 9（右上図）では，O＝できごと，B＝どこで･何をしたか，C＝感想･まとめ，となっている。この３つの段階について，左ページのモデル文では，それぞれが次のように対応している。

O	できごと	⇒	校外学習
B	どこで・何をしたか	⇒	鎌倉に行った 大仏を見た 博物館で歴史を学んだ
C	感想・まとめ	⇒	楽しかった

このようにモデル文の構成をまずは確認することで，内容のつながりを意識させることができる。この内容の流れは，ディスコース・パターンとも呼ばれ，トピックやテーマごとに使うべき適切なパターンが異なる。USE Write では，このディスコース・パターンの学習を指導目標の１つとするとよい。



Book 1
Lesson 9
USE Write

USE Write で実際に英文を書く

USE Write の右ページは実際に英文を書く活動であるが，すぐには複数の文が書けないので，ステップを踏むことで，そのプロセスを学習する。

Step 1　テーマについて自分が書く視点を選ぶ
Step 2　日本語でメモを作る
Step 3　英語でメモを作る
Step 4　英語のメモをもとに英文を書く

Step 1 では，テーマについて，どの切り口で書くかという視点を決める。Step 2 では，その視点の範囲内で，自由にアイディアを出す。この段階は，最終的に作文に入れるべき情報かどうかは気にせずに，多くのアイディアを出す段階であるので，日本語で行う想定をしている。そして，まとまりのある英文を書くために特に大切な段階である Step 3 では，Step 2 で出したアイディアから，与えられたディスコース・パターンを意識して，英文に入れると判断した項目を選択して，英語でメモをしていく。

Book 1 の Lesson 9 では，「できごと」⇒「どこで・何をしたか」⇒「感想・まとめ」というパターンが提示されているので，それぞれに当てはまるものを選ぶ。ここで特に注意したいのは，Body に該当する「どこで・何をしたか」が羅列的に書かれていると，まとまりのある文章にはならないことである。そうならないよう，それぞれの事実について，付加できると思われる情報の中から，書く意味のある情報を選ばせる必要がある。例えば，「お弁当を食べた」に続くものとして，「みんなで話しながら食べた」という内容が思いついたとする。「昼食」という点では内容はつながっているが，この内容は，海外の姉妹校の友達が読んで面白いと思うだろうか。代わりに，大仏の大きさを調べてそれを載せることや，屋外にある大仏であるという事実を紹介することの方が，読み手を考慮した場合，有益な情報だと言えるだろう。このように，Step 3 の段階では，活動の最初に確認をした「状況」や「読み手」に立ち返って，どんな内容を書くのが適切かを判断させるとよい。

英文を書く準備をする Step 1 ～ 3 を経て，実際に英文を書く Step 4 ではモデル文や Idea Box を利用したり，付録の「基本文のまとめ」を参照したりしながら，どの文構造や文法事項を使うと，メモした内容が正しい英文で書けるかを考えさせるとよい。

USE Write で何を学習するか

USE Write では，これまで習った言語材料の活用だけでなく，「ディスコース・パターン」や「英文を書くためのプロセス」も学習させるとよい。そのためには，活動後の振り返りとして，でき上がった英文だけに目を向けるのではなく，「どんな手順で英文を書いたか」とか「次にまとまった内容の英文を書く時に使えるスキルや手法は何か」という問いを与えることも指導の一環として意義があると言える。